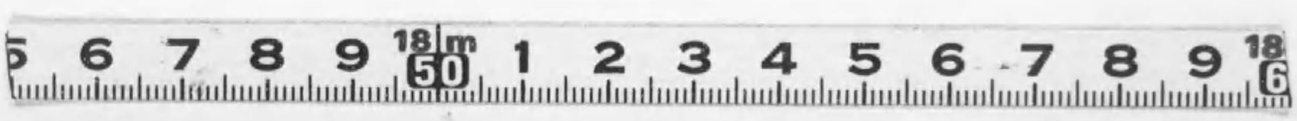

特116
431

紙本

極樂餘閑集第一篇

實用的人間學の一斑

特116
431

序

友人金杉博士は素と東西の哲學に趣味を有し夙とに王陽明に私淑し其學に造詣すること頗る深く簡易明白知行合一を以て處士の要訣となし常に實用的人間學なりと稱揚して啻に之を口に唱ふるのみならず着々之を實踐躬行して善は卽知卽行し惡は卽知卽禁せんことに勉むるは同人の推服する所なり頃日其蘊蓄する所を著述刊行するに際し余に序を需めらる乃ち簡單なる數語を以て之に應ず蓋し冗々贅辯を費すは簡易明白主義の趣旨に適合する所以にあらず耳鼻の直感則ち是れ眞理なればなり

大正拾四年六月

鎌田榮吉識

大正
14. 7. 16
内交

自序

道人一たび請に應じて王陽明學の一斑を交詢社に講演するや、其速記せしものを活字に上せて一本を贈れとの催促諸方より來る。其外交的言辭とは知りつゝも調子に乘るのが人間の弱味でもあり、又良知でもあるので遂にムラ〳〵と要求に應ずる意思となり。急に二三の增補訂正を加へて出來たのが此一小冊子である。自分にさへ不明なる點が往々あるのだから他人には尙更らの事と心配せざるを得ぬ。

三百九十六年前の明人の言ふたことを今日此頃珍らしそうに口移しに及ぶなどは頗る時候後れであつて張橫渠の曰ふたる『學者須洗舊見而生新見』の意味よりすれば甚だ因循姑息の觀なきに非ずだが。道人は太宰春臺の所謂『先王の尊きこと天の如く。孔子の敎の明かなること日月の如く。今の世に生れても千古の聖人に拜謁して親しく嚴命を聞くが如し』として先王、孔子等を尊敬せるが如く王陽明を尊

敬するものでは無く。又經傳を援引して以て門面を飾らふとするものでも無い。乍併眞理は千萬年に亘りて變ること無しと信ずるので少壯の士に口移し的に紹介するの決して無益のものではあるまいと思ふのである。

王陽明の學說は致良知、知行合一が表看板であるが其他百般の事項に就て能く行届いたものである。而して何事も良知と知行合一を土臺として進んで居るのである例之へば其寧靜の功夫の如きは如何にも簡單明瞭である。其大要を記すれば寧靜の法は唯人欲を去りて天理を存するを要す、靜時は念念人欲を去りて天理を存す。動時も念念人欲を去りて天理を存す。寧靜と寧靜ならざるとに關せず、若し那の寧靜によらば惟々漸く靜を喜び、動を厭ふの弊あるのみならず、中間許多の病痛唯是れ潛伏し在りて終に絕ち去ること能はず。事に遇ひば舊に依りて滋長す。理に循ふを以て主と爲さば何ぞ嘗て寧靜ならざらん。寧靜を以て主と爲さば未だ必しも理に循ふこと能はず』と云ふのであゝ。現代の寧靜ならざる世の中。寧靜ならざるコセコセし

た人間の多い際には、此修養は頗る肝要なることの一ではあるまいか。

王陽明が千載の知己とすべきは無爲道者であらう、陽明が劉瑾の爲めに殺害されんとした時脱走し、姓を匿し名を潜めて世を避けんとし、遠く或る寺にかけつけ一泊を請ふて拒絶され、已むを得ず虎哮天をも衝くが如き物騒なる廟内に一夜を過ごすことゝなりぬ、寺僧等は明朝に至り彼の必ず虎の喰ふ所となりたるを察したるに虎穴同様の場所に在り尚ほ依然として生存せしかば、こは常人に非ずと云ふことになりて住職に申告するに至り、其時不圖邂逅したのが十七歳の時鐵柱宮にて面會し二十年の後再び海上に見るべしと云はれた無爲道者であつた。道者は懇切に善後の方策を提言したので平然として龍場謫居を甘受し。遂に一大眞理を發見するに至つたのである。道者は陽明十七歳の時既に其非凡なるを知り。今又其鑑識の誤らざりしを知りたるものにて、左の詩能く證明し得るであらう。

二十年前已知君　今來消息我先聞。

君將性命輕毫髮。　誰把綱常重一分。
寰海已知誇令德。　皇天終不喪斯文。
英雄自古多磨折。　好拂青萍建大勳。

二十年前より君の人と爲りを能く知る。今度の事も先から能く知つて居る。君は生命を毫髮より輕んじて居る。三綱五常の道などは君を輕重するに足らぬ。天下皆君の令德を知つて居る。天は決して斯文を喪ふものではない。英雄は皆逆境に錬磨されぬは無いことは古今一轍である。宜しく此浮草の如き世の浮沈に頓着せず。打ち拂つて以て大勳を建てよと激勵したのが。龍場五年の悟道の端を開いたものと觀るべきである。其時陽明は大に此詩に感奮し左の一絶を殿壁に題して謫に赴いたのである。

險夷原不滯胸中。　何異浮雲過太空。
夜靜海濤三萬里。　月明飛錫下天風。

如何に其勇氣の堂々たりしかを察すべしである。王陽明が脱走して山寺に一泊を請へしときは恐くは睡眠不足と大疲勞の極度に達し

たるのときにて。其廟内に死せるが如く平臥しつゝありて俗僧に一驚を喫せしめたるは想ふに其處が虎の巣窟たるを知らず。又虎の咆ゆることあるも熟睡最中にて毫も知らざりし者ならん。然らざれば常識の發達したる大智者が故意に危險を侵すが如き愚を爲すべき筈はないと思ふ、古今の俗物往々斯の如きの記事を爲すは唯後人を惑はしむるのみにして何等の益も無いことである。陽明は決して無法な冒險的の人では無かつた。自ら偉らがらうとした人でもなかつた。學問を爲しても。軍を動かしても。道を窮めても。誠心誠意であつたことは詩文に精通し。戰爭に常勝將軍の名を取り。道義に一新生面を開いたることによつても明瞭である。

信夫恕軒談藪序の一節に曰く『嗚呼談は難いかな、之を語るに花月を以てすれば則ち浮華と爲し、之を語るに貨殖を以てすれば則ち貪婪と爲し、之を語るに戲曲聲妓の醜美優劣を以てすれば則ち以て輕薄狂盪猥褻艶冶と爲し、罵らざれば則ち笑ふ、或は忠孝節義偉人傑士の事蹟を談ずれば以て迂濶と爲さずんば則ち以て奇僻と爲し、經義を

談ずれば則ち勃粹理屈と爲し、史傳を談ずれば則ち雜博浮誇と爲し、諸子を談ずるを以て好奇表異と爲し、詩文を談ずるを以て雕蟲末伎と爲し、政治は則ち權勢に嫌はれ、德行は則ち鄕愿に近し、嗚呼談亦難いかな』云々、是れは余が、毎ね、に、尤も、至、極、と、愛、讀、して、居るものである、乍併所謂口を使ふこと鼻の如く終日默默乎として囊を括りて咎なく、譽れ無きは腐儒なりと云ふ語あることも察し、敢て惡事にも非ずと信じて先人の口移しをなしたる次第なれば、其雜博浮誇とか。好奇表異とか云ふ謗は固より甘受する覺悟なれども。若し此一小言が幾分たりとも當世を規諷し、後人を警醒するの一助ともなれば幸甚とする所である。心學は則ち人間學であつて。陽明學は心學中の最も簡易明白なるものと信ずるので、實用的人間學と名けたのである。

道人の年來刊行しつゝある餘閑集は還曆を境界として前半後半の二に別ち。還曆後は之を極樂餘閑集とす。此れは則ち極樂餘閑集第一となるわけである。

大正十四年六月

極樂道人　金杉英五郎誌

實用的人間學の一斑

金杉英五郎述

先般菊池武德君に面會の節談偶ま聖賢の學に及び、余は其際少壯時に知得せし陽明學の一端を話せしに同君は大に共鳴せられたらしかつたが、過日圖らずも本社講莚部より陽明學に就て一夕講話せられたしとの命令に接しましたので、某所にて鎌田理事長に面會し其事を申し陳べ、且つ余の知れる範圍の陽明學は何人も之を知るの理由を以て、辭退致せしに、鎌田翁の言は——るゝには王陽明の說敎はホラの吹きやうによつては何度聞いても有益なるものだから是非一夕賴むとのことであつたので遂に御引受申した次第であります。乍併今日は時間に限りあることゆゑ其說く所は極めて簡單なるものたることは豫め御諒知を願ひます。

諸君！。

宗敎、聖賢學、哲學、禪學等即ち道學、心學と稱するものは其名は種々ありますが、何れも人生至善の理を說くに於ては略同一にして、人間界は自ら靈妙、自ら圓滿、自ら正大、自ら光明であると云ふことには、餘り異議が無いやうです。

哲學の最も早く發達普及したるは印度、支那であつて、支那にては堯舜禹湯文武周公等の時代に於て既に其片影を現はし、孔孟老莊等に依つて之を具體化したのである、然るに秦漢の時代には漸次衰退し、唐の時代には韓退之が原道を發表せるものゝ他に哲學として記すべきものは無いやうです、然るに宋の時代に至つて復活して周濂溪、張橫渠、邵康節、二程、朱晦庵、陸象山等が現はれ、孜々拮々各自の所見を說き出しました、就中朱、陸最も卓越して異彩を放つたやうです、而して朱子は博

學にして保守的、陸子は淺學であつたけれども創設的の人であつたやうです。

明の時代には薛敬軒、胡敬齋、陳白沙蔡虛齋等現はれたれども、何れも先人の糟粕を嘗めたるに止まり、所謂陳腐にして一新機軸を出したるものはなく、一も宋の學者に匹敵すべきものは出ませんでしたが、獨り鷄群の一鶴とも申すべきは、古人の說に拘泥せず、註釋に力を用へざりし大文章家、大軍略家、大政治家にして而かも大哲學者たりし王陽明であります。

支那に於ける哲學は一方には治國學となつたものでありまして、其順序を申せば御存の通り訓詁學又古學又漢學、心學又宋學又性理學、考證學又明淸學と云ふことになるのであります。

訓詁學即ち漢學又古學とは秦始皇が六經を禁き、儒士を坑にするの亂暴を働きたる爲め、其後を受くるものが壁間若くは山間の僻地に於て其遺を拾ひ、缺を補ひ、章句を輯め、訓詁を明かにするの急務を生して努力したのである。然れども訓詁の學はオリヂナールに非ず、イミテーションにて其記誦に滯るの弊を免るゝ能はざりしは已むを得ざることであります。

心學即ち宋學又性理學とは漢學の弊は章句に拘り、理義に疎きを諒り、孔子を去る千有餘年周濂溪、張橫渠、程明道、程伊川、朱晦庵の徒性命を窮め、理義を說き、之を以て聖賢心授の傳法と稱するに至つたので、即ち心性を表章し、理義を發揮するに勉めたのである。然れども性理の學は何れも空疎に馳せ易き弊を免れざりき、而して當時最も盡したるは朱晦庵、陸象山にして互に相對抗せり、甲は程伊川に基き、乙は程明道に私淑する所多く而して朱子の學は特に後世に亘りて隆昌普及せられたることは天下萬人の認むる通りである。

考證學即ち明淸學は、心學の弊は經義古訓に疎なるを免れずと說き、是に於て明淸の諸儒が心學は空疎なればとて漢學に溯り、經史を考證し、專ら古訓經義を尋ねんことに勉めたのである、當時朱明、陳白沙等起り、次で王陽明起つたのである、王陽明の學は陸象山に基づく、其說く所簡易明白、實踐躬行、單刀直入各人をして自ら反顧して容易に作聖の頭腦を得せしむるものなりと唱道し、忽ち毅然として朱子學と相對抗するの勢となつたのであります。

時世の變遷は各般の言論文章の複雜多端となるべきは免れ難きことにて、堯舜禹湯文武周公の時代は唯『人倫を明かにするに

在り』が主要なる法言にして複雜なる理屈は至つて少かりしに拘らず、無爲にして治まつたのである、然るに孔子に至りては非先王之法言不敢道と說きしにも似ず、其言論文章甚しく多きを加へた、これは當時既に民衆思想の著しき變化を來したので之を抑制敎訓せざるを得ざるに至つたのである、孟子に至りては其立論に反抗するものも頗る增多し、一層複雜となつた、今先王の法言、孔子、孟子の所說等の一例を擧げて對照せんに、先王は君雖不君、臣不可以不臣と說き、孔子は君使臣以禮、臣事君以忠と唱へ、孟子は齊の宣王に告げて君之視臣如犬馬、則臣視君如國人、君視臣如土芥、則臣視君如寇讐と言ふたる如く、先王、孔子の言は穩健簡易なれども、孟子の言に至りては頗るデモクラチツクにして甚だ複雜になつた、而して又其言ふ所人の君たるものを戒むるには益あるべけれども、人の臣たるものには聞かされぬことのやうに思はれるのである。宋に至りては周、張、程、陸の徒愈々益々相競ふて理屈を發表して其學說を複雜ならしめ、格物致知の學に數千萬言を費やし、往々博くして要所少く、高くして歸着する所を得ざるの弊を生ずるの傾向となつた、其間幾多の學者各自說を出して相討議せしもの其數實に擧げて算ふべからざるものありたるは天下周知の事實である、其複雜にして博高に過ぐるの各家の訓詁學、心學、考證學及び懸空靜守、枯木死灰の如き禪學の弊を歎息して現はれたるものが即ち王陽明學でありまして、古今東西の哲學、道學、聖學と云ふやうなものゝうちにも最も簡易明白にして所謂實落入手の工夫を說き、何人にも應用し易き實用的人間學として、古來幾多の陳籍に沒頭して生涯何の得る所なき學問の比に非ざるものゝやうに思はれます。今日此頃三百九十六年前に他界された王陽明の說などを珍重らしく陳述するのは頗る迂遠のやうなれども、眞理は千萬年を經るも同じく眞理であると信ずるものであります。

第一、王陽明の略歷

王陽明は王右軍義之の後でありまして明の憲宗成化八年九月浙江省紹興府の餘姚縣に生れました（千四百七十二年生千五百廿九年歿）王華（龍山公）の子也、資性豪邁磊落、朱子や程子の其性至つて窮屈なるものとは全く反對であつたそうだ、其經路に於て或は道士を見て養生の術を聞き相對して歸るを忘れ、或は兵家の秘書を究めて大軍師となり、或は良吏の名高く、權門

に抗疏し寃者を救はんとして數回の危禍に罹り、或は堂中に座して導引の術を行ひたりしが、三十四歳にして前に學ぶ所悉く迂遠死灰人間に何等の用なきを悟り、專ら格物窮理に熱中し、三十七歳一夜大に格物致知の旨を悟り飛び起きて傍人を驚かす三十九歳龍場に謫せられ、流離其處を得ざること前後五年、此間苦心多く工夫の密、進修の精勵勃たるものあり、

龍場在留中の書に左の一節あり。

龍場地在貴州之西北、宣慰使所屬、萬山叢棘中、蛇虺成堆、魍魎晝見、瘴癘蠱毒苦不可言、夷人語言、又皆缺舌難辨、居無宮室、惟累土爲窟寢息其中而已。王子又曰吾學得之九死一生中と。其如何に苦慘を甜めたるかを知るに足らん。

次で大に陸、朱の學を論究し、默座澄心の工夫も案出せり、四十一歳より四十八歳迄名吏として各種の職を奉し、又數回の戰爭に功を奏す、當時再び群小の忌む所となる、五十歳始めて良知の敎を揭ぐ、それより以前四十七歳の時陣中より門人に贈りし書中に『山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し、區々の鼠竊を剪除するは何ぞ異となすに足らん、苦し諸賢心腹の寇を掃蕩して廓淸の功を收めば此れ誠に丈夫不世の偉績なり』とあり、良知は彼が五十年間の練磨工夫に成りたるものにて是れより後は專ら致良知の三字を揭げて默座澄心を待たず、習はす慮らずして人心自ら天則ありて悟らしむるを得知したり。

王陽明は其後亦屢々軍事に盡し、死に至る迄兵に從ひ嘉靖七年十一月南安に卒す、享年五十七歳、官臣の異議にて爵位贈諡の諸典行はれぢること久しく、加之僞學として之を禁ぜらるゝに至る、其後穆宗立ちて新建伯を贈り文成と諡せられ、種々の恩典一時に加はる、實に死後三十八年也、又萬歷中には孔子の廟廷に從祀せらるゝに至れり。

門弟黃綰が王陽明の行狀を選びしものに據れば先生初め任俠に溺れ、再び騎射に溺れ、三たび詞章に溺れ、四たび神仙に溺れ五たび佛敎に溺れ、正德丙寅三十五歳にして始めて聖賢の學に歸せりとあるは如何に變遷極まり無く、艱苦精勵せしものたるかを推知し得可し。

陽明子の壯年時は所謂人衆くして天に勝ちたるのときにて、天に逆ひ、理に悖り、唯私利を營み、利慾を逞くし、上は天子を挾み、下は百姓を虐待し、朝に於ては賢人君子を陷擠して溝壑に轉せしめ、野に於ては俊才英傑の士をして餓莩となりて道路に

充たしむの狀態にて、一の陽明子あるも滿天下の劉瑾（奸惡の小人）を如何ともする能はざりき、然れども正義なる張永の密奏に由り一時の寵を以て政權を專らにしたる高官劉瑾は遂に九族を夷せらるゝに至り、所謂天定つて人に勝つことになつたのであるが、此間に於ける陽明子の辛苦艱難と修養の進展は實にすさまじきものありしを察知せらる、陽明子の施政方針（廬陵縣其他）は孔子の言はれたる道之以德、齊之以禮すれば有恥且格であつたので、到る所平安であつた、劉瑾等の政治は孔子の最も惡むべしとなしたる收斂を施し、民をして其所を失はしめたる上に、道之以政、齊之以刑と云ふ方針であつたから、民亦免れて恥なく恥無ければ敢て惡を爲さずとも惡を爲すの心は已む能はずして、囹圄は常に充ち、訴訟已むことなく、官吏足らず、財用增し收斂多く、民益々窮して訴訟盜賊日々に多く現はれ、免れて而して恥なく、恥無ければ惡を爲すと云ふことになり、即ち民の惡しきは爲政家の人を得ざるにあり、其人に非ずして其民たらしめんとするは成ること能はざるは昭々として日月よりも明かにて有治人而無治法と云ふことであつた、陽明子の聖學は實に此悲風慘雨の間に生れたのである。

王陽明の始めて自說を唱へし時には來り學ぶものは其近傍郡道の士に過ぎざりしが故に、當時求同志之士、二三子之外邈乎其寥々也の歎を發せしが、龍場一悟の後笈を負ふもの四方より集まり、其場所は浙中（浙江省）楚中（湘南省）、南中（四川省）江右（江西省）北方（山東、河南、浙西諸省）粵閩（廣東省）等にして雲霞の如く、忽ち良知主義は四百餘州に傳播し、道義、政治、事業等に與へたる好影響は少からざるものであつたと言ひ傳へられて居るのです。

第二、陽明學とはどんなものか

支那の哲學は其大部分が倫理學なることは今更めて申す迄もありません、特に王陽明學は倫理學に重きを置きたる哲學である、彼の善念存時即天理とか、立志者、長立其善念而已とか云ふことは總て學問上の根據を倫理に置きたるものである。

王陽明の心學は孔子學即ち品性學にもあらず、程子朱子のやうに性理的に仁義孝悌のみを說きしにもあらず、唯學んで聖人たらんとし、敎へて聖人たらしめんとする聖人學とも云ふべきものである、其言ふ所は愚夫愚婦も其良知を存養擴充すれば聖人となることを得ると云ふのである。

王陽明は天下之大亂、由虛文勝而實行衰也と唱へた程にて、總て長たらしき理屈つきの窮理的虛文は何にもならぬ、成る可く簡易明白、實踐躬行の方針で單刀直入にやらねば萬人の用を爲すべきものに非ずと云ふのが主旨でありまして、王子立つる所の各種の說は皆其主旨から割出されて居るやうです、荻生徂徠、太宰春臺などは古學一點張りにて孟子以下は悉く僞學であるとして非常に排斥し、又王陽明は聰明の士なれども釋氏にかぶれた僻說なりとして大に卑下して居るが、それは大なる誤謬にて王陽明は幼少時より聖賢の學に志し、中頃種々の研究を爲したるものなるが晚年には全く佛學に關係は無かつたのみならず、寧ろ佛學を輕視して居つたのである、門弟黃綰の撰びし王子行狀に據れば、先生初め任俠に溺れ、再び騎射に溺れ、三たび詞章に溺れ、四たび神仙に溺れ、五たび佛敎に溺れ、正德丙寅三十五歲釋然として聖賢の學を專らにするとあるに見ても明である。

朱子學と陽明學とは其倫理を基礎とする點に於ては同一なれども其施行の方法には大差あり、即ち朱子學は理氣併存說（理は形而上の事にて道であり、大極である、氣は器にして物質なり）にして又心と理とを別にした、故に格物窮理を必要とし、外物を研究して我心の事を明にするの要ありとした、陽明學は理氣合一論（理あれば氣あり、氣あれば理ありで、此心即ち是れ理と說く）にして心を明かにすれば天地萬物の理自ら明かなりと考へたのである、又朱子は先人の所見を飽迄研究してそれを骨子として說を立て、王子は我心を主として自ら考へたものにて即ち創設せるもの多し、是れ創設主義の陸象山の流れを汲みしにも因るであらう。又王子は人間には善も無く惡も無い、無善無惡、謂之至善と唱へて居る。

余は今夕王陽明學中より良知、知行合一、傳習錄中の四言敎に就て極めて簡單に申述べ、最後に日本に於ける王陽明學の一端を略述して責を塞がふと思ひます。

（1）良　知

孟子に良知良能の說（孟子曰、人之所不學而能者良能也、所不慮而知者良知也、孩提之童、無不知愛其親也、及其長也、無

不知敬其兄也、親親仁也、敬長義也無他達之天下也）があるが、知は心に屬し、能は行に屬す、陽明は知れば必ず行ふ可きものなれば良知は即ち良知良能を兼ぬべく別に區別するの要なしとして孟子の所謂良知のみを擧げて研究したものらしいのです其處で造化的即ち天地間の萬物一體に良知にして人の生れ質きのまゝ自然に善なるものをも良と云ふので人の此良心あるは天に日月ありて物を照し、地に山川ありて物を生ずるか如く、又陰陽寒暑の運行するが如く、草木蟲魚の性能あるが如く、猶紅花新綠の春夏に發し、鷄の晨を告げ、犬の夜を守るが如く、天然の良知は皆吾人固有のものたること明かなり、唯其れ或は暗く或は違へ或は蔽はるゝ爲めに其本然固有の美を損するものにて苟も之を本心に求むれば其明瑩なること掩ふ可らず、眼の黑白、耳の淸濁、鼻の香臭を別つが如く、人心の善惡を知ると異なるの理なく、古今に通じ物我に亘りて同一體の良知あり、其良知が增育して極致に至る者を聖人と云ふと申すのが良知の本旨である。前述の如く日月の旋轉、四時の運行、萬物の生育悉く良知であつて、良知は即ち造化的精靈にて其精靈が天を生じ、地を生じ、鬼を成し、帝を成すのである。人心の明德は申すに及ばず、草木瓦石も皆良知作用に出でざるは無し、故に人的の良知、草木瓦石的の良知あるを知るべく、心の虛靈明覺は即ち本然の良知也、良知とは我心の天理自然明覺の處を指す名目である、即ち一點虛僞修飾なき眞誠正實の心は、必ず善を善とし、惡を惡とし、好惡偏せず、是非誤たず、自ら精明靈妙があるので之を良知と謂ふ、又知は心の光にして善惡を照すこと白日の黑白を分つが如く然り、人の是非善惡を識別するは自然にして、本體其まゝ決して人爲こわたるべきものに非ず、即ちこれが天然の良知である、古の聖賢は千言萬語此良知を致し盡して遺憾なからしめたものである、故に我良知の天に得たるものを爲し盡して毫も遺憾なきに至りたるものは即ち聖人にして、王陽明は之を良知を致すと說明して居ります。

而して之を爲すには敢て窮理を要せず、勞苦を要せずして本體其まゝなるを良知と云ふのだそうです、其故に識知即ち見聞より出でゝ利知按排を以て辨知したるもの例へば俗知、無知、姦知、邪知等は悉く良知發見の途を塞ぐものだそうです。

又良知とは心一點張りのものにて、心即ち理也で、心と云ふものは何でも自ら知る力を持つて居るものと考へたのです、天下又有心外之事、心外之理乎とか、心即道、道即天、知心即知道知天とか、心便是根、許多件件便是枝葉とか、善惡唯在汝心

循理即是善動氣便是惡と云ふのです。

知と能とは天然固有のものなれば無知之知、不慮而知、無能之能、不學而能にて、心明かなれば知亦明なる所を發すべし、即ち此學問の根本は自分の心を明かにするにありますと云ふことです。

王子が『答人問良知二首』に左の如きものがある。

一、良知即是獨知時。此知之外更無知。誰人不有良知。在知得良知却是誰。

二、知得良知却是誰。自家痛癢自家知。若將痛癢從人問。痛癢何須更問爲。

王子曰く僕誠賴天之靈、偶有見於良知之學、以爲必由此而後天下可得而治云々。

又曰く未發之中即良知也、無前後內外、渾然一體者也、有事無事可以言動靜、而良知無分於有事無事也、寂然(體)感通(用)可以言動靜、而良知無分於寂然感通也、動靜者所遇之時也、心之本體固無分於動靜也と。

良知は孟子より出でたるものなれども、孟子は唯仁義の良知に本づくを說明せしに止まりて、王子の如く良知は靈明昭覺天地萬物を含みて透徹せざるなしとは云はず、王子は是非の心を良知なりと解し、孟子は是非の心は智の端なりと言へるの差があるのです。

良知は人に在りては是非の心となり、仁義の德となり、鳥魚に在りては空に翱り、淵に潛む作用となり、草木に在りては生育繁茂の作用となり、瓦石に在りては愧然磊然たり、五穀禽獸の人を養ふ可く、藥石の疾を療すべく、蛇蝎は其良知を以て身を衛り、身を衛る爲めに人を嚙み、人は良知を以て其毒を知り、其毒を知る爲めに之を避け、若くは之を屠殺するものにて、此等は一二の例なれども天下の萬事萬物皆此理數に漏れず而して良知は個々人々の心の德にのみ有るべきに非ず、天地萬物一體てう理論より起りしものにて、區域の頗る擴きものであると說きしものである。

耶蘇敎の上帝、主宰、造物主等と稱する各殼の驚くべき良能は皆良知であると云ふのであると思ひます。

知は是心の本體、心自然に會知す、父を見れば自然孝を知り、兄を見れば自然弟を知り、孺子井に入るを見れば惻隱を知る

即ち心に存する孝悌、忠信皆此れ便ち良知なり、此心の良知をして壅塞流行せしむることが便ち是良知を致すのであるそうだ

又良知は心の體なり、意は心の動なり、故に意は其不知を患へずして自ら欺くを患ふるのみ、人々自ら欺きて始めて惡ありて故に其欺罔虛僞を除き去り、意をして自ら地に復らしむれば適くとして良知の發見流行に非ざるなからんとも說いてあります

スピノーザの所謂我々の智識は始めから存在すれども唯それが暗まれて居ると云ふのと、王子が智識は自然存在するものと看做し、唯良知を明かにすれば物事を知ることを得ると說けると稍似たるものがある。

王子は道を知るものを三等に分ちて良知の最も尊ぶ可きを示す、即ち第一、生知安行(聖人)、第二、學知利行(聖人の次)、第三、困知勉行(頗る下等)。王子曰、天理は靈明にして所謂慮らず、學はざるの良知なり、而して身は其形とする所を言ひ、心は其主たるを言ひ、意は其流行を言ひ、物は其感應を言ふ、須らく知るべし形即ち主、流行即ち感應、層次なく、彼此なく起滅なく燦然として條ありて而して渾然一體なる者指す所に隨つて名を異にするのみ、故に曰く身、心、意、知、物は一なり、統べて而して之を言ふときは一良知の作用に過ぎず、而して大本達道此に備はる、夫れ良知瑩徹思勉を待たずして、而して其天則に順ふ者は聖人也、私に克ち、欲を治すること能はず、遂に自ら其良知を蔽ふ者は衆人也、良知蔽はるゝと雖固有の明は未だ嘗て已まざるものあり、因りて之を致して擴充到底する者は學の功也、故に志を立て功を下すに其力を用ゆるの地は專ら格物に在り、而して良知を能く存養擴充して其究竟精髓に至りたるもの則ち聖人であると云ふて居る。

王子曰く致良知の日間の工夫(所作)に紛擾を覺へたならほ則ち靜座せよ、書を看むに懶きことを覺へたならば則ち且つ書を看よ、(座禪に非ず)是れは亦病に困りて而して藥するのである。又氣の動きは喜、怒、哀、樂、愛、惡、慾の七情がつき纏ひて本心の害を爲すものなれば、これが省、察、克、治の功を怠るときは復た救ふ可らざるに至ることを知る可く、又人の驚くこと多く、怒ること多く、憂ること多き病あるとき、只その內の己れが常に患ふる所の一つに克ち得てこれを去るときはその餘は自ら正しくなるものたるを諒れよと。

良知はす毫の細工を加へざる本心なれが其善を爲し惡を去るには性命をも顧みず、即ち身を殺して仁を爲し、生を捨てゝ義

を取るの志を生じ、仰て天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず、中已れに愧ぢざることになると云ふのが本旨であるらしい。

王陽明の良知に關する詩は多くあれども其主なるもの二三を左に示すべし。

一、箇々人心有仲尼。自將聞見苦遮迷。而今指與眞頭面。只是良知更莫疑。

二、問君何事日憧憧。煩惱場中錯用功。莫道聖門無口訣。良知兩字是參同。

三、人人自有定盤針。萬化根源本在心。却笑從前顚倒見。枝枝葉葉外頭尋。

四、無聲無臭獨知時。此是乾坤萬有基。拋却自家無盡藏。沿門持鉢效貧兒。

五、爾身各各有天眞。不用求人更問人。但致良知成德業。漫從故紙費精神。

乾坤是易原非畫。心性何形得有塵。莫道先生學禪語。此言端的爲君陳。

六、人人有路透長安。坦坦平平一直看。盡道聖賢須有秘。翻嫌易簡却求難。

只從孝弟爲堯舜。莫把辭章學柳韓。不信自心原具足。請君隨事反身觀。

此等の詩は何れも良知、知行合一、致良知等の意味を含んで居るものゝみであります。

良知は天地萬物何事に拘らず、何物たるを問はず悉く應用し得るものにて、例之へば福澤諭吉翁の夙に唱導せられたる獨立自尊の如きは良知の眞髓である。宇宙の森羅萬象人畜草木悉く獨立自尊ならざるものはあるまい（寄生性の植物及ひ動物を除く）、千萬億兆無數の無機物及び有機物の各自悉く其形體、性狀、作用及び存在の狀態を異にするは是れ則ち獨立を意味するものにして、又自尊たるを疑ふことは出來ません、特に萬物の靈たる人類に於ては其長幼男女を問はず、五臟、六腑、五感、七情に至るまで、それ相應に獨立自尊を本體として之を善なり是なりと知得することは自然にして、天然固有のものたること明かなり、それが即ち良知である、其故に人間が其良知を失ひ、其心が或は暗く、或は迷ひ、或は蔽はるゝに至れば良知發見の途を塞ぎて、寄生的依賴心となり、卑屈的陋劣心となるものにて、即ち意の動きを生じて自ら欺くの手段となり、それが惡となり、非となるのである、換言すれば、獨立自尊は窮理を要せず、勞苦を用へず自然に具備するものにて寸毫の細工を加へ

ざる本心なれば、其所爲甚だ容易にして仰て天に愧ぢず、俯して人に愧ぢず、中に心に愧ぢざる良知の存置と謂ふ可く、最も高尚にして最も善良なる治國策であると信じます、國民悉く獨立自尊の良心を保持せんか、延て國家の獨立自尊を向上せしむる所以であつて、民衆思想は穩健着實に、國家は泰安隆昌たるべきは當然のことであつて、福澤翁は眞に簡易明白、實踐躬行を旨とされ、能く私に克ち慾を治むることに導き、致良知を一貫したる大聖人であると信じます、獨立自尊は我心の天理自然を明覺して一點の虛僞修飾なき眞誠正實の發露にして、善を善とし、惡を惡とし、好惡偏せず、是非誤たず、自ら精明靈妙を極めたるものなることは、各位の諒知せらるゝ通りの次第であります。

我國各方面の人が過去廿年來餘りに下向的に人間離れを爲し、古來聖賢の指示したる人間則と隔絕するもの多く、即ち國務大臣と云へば其多くは無定見にして詭辯を弄するものとし、政黨員と云へば其多くは無節操の輕薄者と限られ、實業家と云へば其多くは利己一點張りか、若くは無氣力にして事勿れ主義のものと定まり、學者と云へば其多くは非常識にして無情、時務に暗く、且つ偏派なるものと定まれるが如く、又現代の聖人、君子、好漢なるものを見るに、其多くは柔弱不振にして、理義善惡を明晰せず、唯小悧巧に世俗に投合することのみに努むるの傾向となりたることは、此まゝに打過ぎたなら前途如何に移行すべきかは大に考慮せねばならぬことであらうと思はれます、右の如き狀態となりたるは何故であるか、敢て讀書せざるが爲めのみでは無い、虛弱なるが爲めのみでも無い、佞奸、猛惡、邪智なるが爲めのみでも無い、恐くは多くの人々が良知を解せず、眞、善、美を無視するに因るべく、換言すれば自家の自然の本領を完ふせざるが爲めならんと思はるゝのであります、

スタインが『人間は其職の何たるを問はず、哲學の研鑽を忘れてはならぬ、哲學の主旨は遍く事物の關係を觀て概括の定則を察するに在り、此諒解に乏しきものは決して卓越俊傑の士たるの素地を作ることは出來ぬ、而して其素地とは平素事物に精勵し、時に臨み艱難に耐ゆるの氣象を兼有せしむること是なり』と言はれたることも亦此意思に他ならざるべしと推知せられ、又希臘哲學者が德の基礎は節制、正義、勇氣、智慧の自然發露であると說きしも王陽明が致良知に努めたると大に類似するものなりと信ぜられます。昨今我國に於ける政黨員の動作は或は甲より乙に轉じ、乙より丙に移ること下女下男の主家を轉ずる

よりも輕薄なるが如し、是れ節制の何ものたるを等らぬ爲めであらう、其總裁を捨つること蔵展の如し、是れ正義の何ものたるを知らぬ爲めであらう、自黨のみにて組閣し得るの機會を得るも因循遲疑決行する能はず、是れ勇氣の何ものたるを知らぬ爲めであらう、其任に非らざるを自覺せずして其輕々しく地位に就くもの往々あり、是れ智慧の何ものたるを解せざるが爲めであらう、世の中に良知を解せざるより俗惡なるは無く、良知を致さゞるより危險なるは無からうと思ふ、就中司命の職に在る醫師の仕事などは寸毫も良知を缺くことは出來ませんものです。

（2）知行合一

知とは心に善惡是非を辨知するを云ひ、行とは身に善を行ひ、惡を斥け、是を取り、非を捨つるを云ふものにて、之を合一なりと唱へしは王子の創見にして、從前の諸儒は知は知、行は行として二段階級あるが如く論せしものであることは各位の知らるゝ通りである。陸象山も知行有先後而知行遂歸一矣と云ふて居る。

朱子學の所謂致知格物は只漫然と事物の理を窮むることゝなり、知先行後の弊に陷るものにて知は是れ有的の主意、行は是れ知的の功夫、知は是れ行之始、行は是れ知の成るなり、知は則ち思按分別にして行は則ち知の功夫たり、されば知はこれ行ひの始まる所にて、行は是れ知行の所作に成りたる所を云ふ、又未有知而不行者、知而不行只是未知、知者行之始、行者知之成ものにて知ることは行ふことゝ同じ事、知ると云ふことは最早行つた時である、知行合一は饑者の食を得て生を維かんとするを以ても說明し得べしと王子は說いたのであります。

ソクラ！テスの智德合一は智は即ち德を生み、德は即ち智を得ると云ふのと其趣稍異なれども、其基は大に似たるものと謂ふことが出來ると思ひます。

門弟が知行合一に就て問ひしに王子答曰、今人の學問只知行分つて兩件と爲すに因り一念の發動是れ不善なりと雖、然も却つて未た曾て行はず、便ち禁止し去らざるありで、我今簡の知行合一を說く、正さに人一念發動の處便ち是れ行了るを曉り得

んことを要す、發動の處不善なれば就て這の不善的の念を得て克倒し了つて、須らく根に徹し、底に徹し、那の一念の不善をして潛伏して胸中に在らしめざらんことを要す、此れは是れ我言を立つるの宗旨也云々、即ち截然と是を是とし、非を非とし毫も遲滯なかるべきを示したるものである、例之へば政黨は確乎たる主義綱領を定めて立法の大權を發揮すべく、國務大臣亦一定の大主義を立て行政の大權を執行すべく、政黨は其主義を宣言し、國務大臣は其政策を公示するも、若し兩ながら之を行ふ能はざれば共に知行合一たる能はず、況んや甲黨を去りて乙黨に移り、或は寂然と孤立偏在し、或は盲從兩屬して反覆常ならざるものに至りては、唯知行合一の本義に背くのみならず、實に禮儀なく、廉耻なきことになると解せざるを得ざることになるのである。

要するに今や知行合一を解せざるは唯吾等のみに非ず、實に世界共通の痛恨事にして、百般の工藝技術は駸駸乎と驥の野を行くが如く進み、文物法理は洋々乎と河の海に注ぐか如く展るにも拘らず、道義の觀念全く頽廢して之れと相背馳するの醜狀瀰蔓するを以て之を證すべきである、苟も世界の人間をして邪蹊曲路に陷らざらしめんとせば須らく大道を求めて知行合一の法を講ずること最大の急務であると思ふのであります。

（3）四言教

王陽明の門弟徐愛の著したる王陽明傳習錄中に四句訣又四言教と稱するものかある、これは主として初入門に授けるものであるそうだ。

第一句　無善無惡是心之體

心の體には善なく惡なきものにて人々力を用ひて至るべき目當である、即ち理氣は合一、有形無形一物にして離る可らず心は香も無く又聲も無いと云ふのが王子の說く所にして、朱子は理は氣を支配す、有形なる氣の前に無形なる理ありと云ふのである。

第二句　有善有惡是意之動

心一たび本位より動けば善となり、形氣より動けば惡となる孺子の井に入らんとするを救ふ心は自在に存在するものなれども、之を救ふと救はざるとは善惡の心の動によるとして即ち行より入りて然る後理を求むることが王子の說にある。朱子は致知格物にて即ち理を主として窮理より行に入るの差があるのです。

第三句　知善知惡是良知

若し惡念起ると雖本體の良知は未だ嘗て亡びず、其故に善惡を知らずと云ふことは無い、良知は天然自然に善良なる知と云ふ意味にて人の心中の主宰なり、即ち自然に知るなり、盜賊が其行爲の惡しきを知るは旣に良知なり、然るに私慾に蔽はれ終に良知に背きて惡事を爲すなり、人本氣になつて良知に質せば大道理は解るものなれども復雜の事項細末の條理には迷ふ可ければ是れに於ては書物に就て師友に問ひて良知を致し極め、天下萬殊の條理を知らざる可らざるものなれども、先づ良知に質し、然る後學文に學ぶべしと王子は誨へぬ。朱子は先づ學問に導き、然る後德性を崇ぶの主旨であるのです。

第四句　爲善去惡是格物

意のある所を物と云ふ天下の事々物々は皆此意に在り、第一良知に質して及ばざる所は學問窮に由り、善惡判然したるときは其善を爲し行ひ其惡を退け去るを格物とす物事を正ふするなりと王子は誨へぬ、即ち貧書生は學問して糊口の種にせんと志を立て良知を得て目的を達し、富豪の子は自發的に志を立てず、父母の勸告に依つて學問するもの多く、甲は知行合一にして行より知に入り即ち王子流乙は朱子流の致知より入るの學問と謂ふことを得るであらう。

右の說明は多くは先人の記する所に依つて概說したるものたることは申す迄も無きことでありますことを御斷り申して置きます。

第三、日本に於ける陽明學

古來學藝の輸入國を以て一貫せる我日本に於ては數千年間の輸出元たる支那に各種の學派ありたるが如く、齊しく種々の學派入り込み大輸入超過を來したるものにて、古學は伊藤仁齋之を尊崇し、荻生徂徠太宰春臺等次で起り、性理學は藤原惺窩、林道春等之を宗とし、踵て貝原益軒、木下順庵等其流を汲み、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里等幕府に召されて其學政を掌り、賴山陽、安積艮齋、佐藤一齋、大橋訥庵、齋谷宕陰、羽倉簡堂、林鶴梁其他幾多の鴻儒踵て現はれて後世を風靡し、恰も一大宗教の觀を呈し、古學派と相拮抗して讓らず、古學派は理性學派を指して淺薄虛僞の學と爲し、特に徂徠、春臺等は孟子以下の學悉く採るに足らずと爲して罵倒し、性理學派は古學派を呼んで文字訓詁にのみ拘泥するの俗儒と爲し、其間折衷派なる井上金峨梁田蛻巖、山本北山、太田錦城等出でゝ古學、性理學共に學ぶ可しと唱道せり、以上三派の他更に一族職を建てゝ旭日昇天の勢を以て進みたるは王陽明學派にして、此派のものは多くは先きに古學若くは理性學を充分に修得せるものなりしを以て、其立論も確實に、且つ自然王陽明の氣質に感化せられ、之を尊崇するの徒往々奇激の士を出すの傾向ありたり、爲めに德川幕府は之を禁じたれども、學徒は名を程朱に托し其實陸、王に從ふもの跡を絕たず、之を目して陽朱陰王の學と云へりとぞ、次で程朱陸王の學互に所見を異にし、相容れざる氷炭の如くなれども其實恐くは朱子の先知後行と說きしと、王子の知行合一と說きしとの間に充分區別を得ざりしの徒多く、只ワイ〳〵と對壘攻守したるものに非ざるかとも思はれる、德川氏は朱學を奬めて國學とし、王學を異端邪說となせしを以て聖堂にては專ら朱程の學を採りし爲め、王學に心醉するの徒も已むを得ず、表面は朱學に勉め裏面は私かに王學の研究を爲せしものにて、佐藤一齋の如きは其一人なりしと稱されて居る、一齋の所謂百年無再生之我、其可贖度乎などゝ云ふ語は王陽明學者に非れば出せぬ文句であると思はれる。

日本にて最初に陽明學を研究したるは近江聖人と稱されたる中江藤樹にして、これは元と朱子學者なりしが王子の識見卓越せるものあるを知りて移つたのである、藤樹は其德行一世に高く、人を感化したること少からず、門下亦俊秀の士多く農村振

興、財政策等の識見事業を以て名を藩かしたる熊澤蕃山亦其一人である。

藤樹の歌に

外にねがふ百のしあんを打すて〻良知の外に利も德もなし

と云ふのがある。

又中秋獨對月と題せる詩に

月明無所礙。相見宜留神。月是何等物。月光則我神。

と云ふのがあるが何れも良知の意がこもつて居る。

藤樹は慥に立派なる聖人であつたらしく、近鄕近在皆其風に感化せられ、他鄕と全く趣を異にしたるものなりしことは今日尙傳唱せらるゝ程である。

熊澤蕃山は聰明博識の大經世家として知られ、百年來儒者の巨擘と稱せらる、徂徠は常に熊澤蕃山の知、伊藤仁齋の行、之れに加ふるに我學を以てせば東海始めて一の聖人を出さんと言はれたそうである。蕃山が備侯の政治の要を問ふたるに對し、奇の一字を以て答へて歎賞せしめたるが如きは良知の眞髓を得たるものと謂ふ可しであらう。

其奇とは如何なる理由かと申すに、上を立つれば下可ならず、下可なれば上立たず、總て政治は上下一致して能く其均衡を失せざらんことを企圖すべきであると說いたものにて、今人亦宜しく鑑むべきことであらうと思ふ。

徂徠豪卓雄邁の質として、前儒を罵倒し、當時の儒者を小兒視す、而かも其蕃山に對しては特に敬意を拂つて其非凡なるを賞讃す、以て其人と爲りて知るべきである、蕃山の要路に在るや、經濟に於て一新路を開き、德惠を布き、貧困を救賑し、武備を充實し、殖產工業を興して餘す所なく、換言すれば能く行政を整理し、社會事業を起し、殖產工業の振興を圖りたるの功績は實に容易ならざるものであつたらしい。

志を立つるもの平生天下第一の人たらんと志すべしと訓へたる貝原益軒は後に程朱に入りたれども、始め陸王を學び相折衷

して公正無私實踐躬行以て學術の天下に用あらんことに努めたものである。其說きたるものに學問之要有二、在知所其未知、行其所已知而已、又曰く爲學之道、須以知道行道爲志、是乃博文約禮之工夫也と、是れ即ち王子の知行合一より來れるなり、又益軒は敎育、養生、氣候、本草等の大研究家であつた、而して良知に就ては其說示せる各方面に其影をあらはして居るやうだ。

三輪執齋は學問文章德行を以て藤樹の再生とも稱せられ、頗る博學多識の人であつたさうです。

大鹽平八郎は洗心洞劄記に大虛心說（大虛と曰ひ、良知を致すと曰ひ、氣質を變化すと曰ひ、死生を一にすと曰ひ、虛僞を忘ると曰へり）を立てゝヘーゲルに符合せる學說を出したる人にて、任俠、奇傑、果斷を以て知らる、（山陽が大鹽に贈りし詩に知君學推王文成・方寸良知自昭靈・八面應鼓有餘勇・號君當呼小陽明と云ふのがある）其學や頗る博く且つ純なるものたるを認むべきも其事の暴なりしは深く怪み且つ惜むべきものであつた。

中根東里は始め徂徠に學びしが後に王陽明全書を讀みて致良知は斯學の大頭腦、良知の本體は天地萬物唯一身なりとの說に感心し王陽明崇拜者となりて名を著はしぬ。

『人謂、泰西之學行、孔子之敎必衰、余謂泰西之學盛、而孔子之滋其得資、夫泰西之學藝術也、孔子之敎道德也、道德譬則食也、藝術譬則菜肉也、菜肉可以助食氣矣、孰謂可以菜肉而損其味邪』を唱へて支那西洋併學を奬勵し、又金滿家たるの法を問へたる人に答へて、足下放尿の時必ず一足をあげて爲すべしと、其人一足をあげて放尿し、これ狗の狀なりと云ひしに、然り苟も人情を知るものは金滿家となるを得ずと人をして呆然たらしめたる立言卓々の佐久間象山。

俊傑を以て東湖と併び稱せられ、東湖を訪ふて東湖の詩に溫酒寒園夜摘蔬、虛心交膝總忘予、議論不熱冷於水、似讀集義內外書（集議內外書は蕃山の著なり）と次韻したる橫井小楠。

高義清節君命にも學派を易へず、祿利の爲めに信ずる所の學を變する能はずと主張して致仕し、熊本侯を感歎せしめて特許優遇を被むるに至りたる北島雪山。

膽略雄大不羈敏健にして好物津村家老を斬つて自盡したる內藤山城侯の儒者竹村悔齋（君が爲め世の爲めなにかをしからん

すてゝかひある命なりせばの歌あり)。

弊を矯め正に歸するに盡し、動靜一致を說きたる吉村秋陽。

『姚江眞傳、更無秘訣、本體即工夫、工夫即本體、苟善徹于此語、則千古之眞傳在于此矣』を唱へたる宇治茶栽培の主唱者にして、行政外交の手腕ありたる春日潛庵。

一代の人心を鞭韃し、天下の元氣を鼓舞し、其力量精神一世を蓋ふの概あり、維新の眞基礎を作りたる藤田東湖(父幽谷は蕃山に私淑し朱舜水亦陽明學に注目した等の關係より東湖亦私かに王陽明學を研究したるものゝ如し)。

君國に無くてならぬ人となるか、あつてならぬ人たらざる可らずと高言したる河井繼之助。其歿するに臨み、王陽明全集及藩主より贈られたる短刀を床上にかざり、香を焚き默禮して上天したる山田方谷。

博識、軍略、德行能く王陽明に似たる西郷南洲等皆王陽明學派の人にして奥宮慥齋其他池田草庵、石田勘平、雲井龍雄等知名の士少からず。

以上記するものゝ他王陽明學派の人々は決して少からざれども多くは幕府に憚つて所謂陽朱陰王組となりて、曲學阿世の徒として葬り去られたるもの多きが如し。

王陽明學が幕府の禁ずる所となりたるにも拘らず、國主にして尙之を尊崇しつゝありたる佐賀の鍋島閑叟の如きあり、左の一詩如何に王陽明を敬慕せしかを知るべし。

堂々大路久荆榛、天以蒼生付此身、
腰下空橫三尺劍、胸間纔著一團春、
千年學術推元晦、萬世英雄見守仁、
寒月寥々小窓底、焚香默座養精神、

(守仁とは王陽明也)

閑叟の王陽明を尊崇せしことは、其臣永山二水を主として王子學を奬勵し、藩の學宗一時王陽明學に傾きてそれ迄の學宗たりし朱子學を廢止せんとするに至つたのでも解る、それが爲めに佐賀藩にては大騷動を生じ、草場佩川等一派は朱子學を支持し若し容れられざれば職を辭せんと迄激昂するに至つた、而して朱子學は幕府の撰定する國學なるが爲めに表向きは朱子學と定めたれども閑叟は終身王子の學に努めたりと云ふ。

古來支那に於ても日本に於ても王陽明の眞意を能く理解せずして妄りに之を秕難せるもの少からず、古學派即ち荻生徂徠、太宰春臺及び多くの朱程學派等は極力反對したものである、春臺の如きは『王陽明は聰明なる人なれども、孔子を信ぜず、六經の道を知らずして、釋氏の說に惑へし故に孟子の良知良能の論を面白く思つて凡ての學者に之を敎て第一義としたるなり、善く聖人の書を讀めば此等の是非は明に見ゆるなり』云々と說いて居るが、春臺が如何に古學派に偏すればとて、其誣言は大きに過ぐるやうだ、王陽明は唐宋以來比類稀なる大文章家と稱せらる、其六經の道を知りたる點に於て、決して春臺輩の下に在るものでは無からうと思ふ、其孔子を信ぜしや信ぜざりしやに就ては、彼の詩文に依つて之を判斷することが出來るであらうホラを吹くことが日本の儒者の一藝ではあつたらうが、徂徠、春臺等は特に其過度なりしに驚かざるを得ぬ、其釋氏の說に惑へしと云ふが如きは全く王陽明の經歷及び其文章をも知らざるものゝ云ふことである、王陽明は多情多能の人であつたので其任俠にも溺れ、辭章にも溺れ、仙術にも溺れ、騎射にも溺れたる事は事實であるが、總ての修養全く完了せし後は專ら聖賢の學に入り嘗に釋氏に惑ふやうのことなきのみならず、反つて迎佛反對の事に力を盡したものである、そは諫迎佛疏を一讀すれば判明することである、其文章蕩々數千言、先づ懇々と聖賢の道を捨てゝ佛道に歸依するの不識を說いたものである。今一節を述ぶれば『陛下誠に其實を得て而して其本を求めんと欲せば則ち請ふ、之を佛に求むるなくして之を聖人に求めよ、佛は夷狄の聖人にして、聖人は中國の佛なり、彼夷狄に在りては則ち佛氏の敎を用へて以て愚頑を化導すべし、中國に在りては自ら當さに聖人の道を用ひ以て參贊化育すべし、猶陸を行く者必ず車馬を用ひ、海を渡るもの必ず舟航を以てすべきが如し、今中國に居つて而して佛敎を師とす、是れ猶車馬を以て海を渡るが如し、造父を御た

らしめ、王良をして右たらしむると雖、但利渉し能はざるのみに非ず、必ず且沈溺の患めるべし、夫れ車馬本と遠きに致すの具にして豈利器ならざらんや、然り而して用ひ其地に非れば則ち技施す所無し、陛下若し佛氏の道以て天下を平治すべからずと雖或は亦以て一身の生死を脱離すべく、以て化育を參贊すべからずと雖、而して時に亦以て群品の蠢頑を導く可しと謂ふ、此二説に就て亦復吾聖人の餘緒を得るに過ぎず、陛下信ぜされば則ち臣請ふ比して而して之を論ぜん、臣亦切りに嘗て佛を學び最も尊信する所自ら謂ふ其蘊奥を悟得すと、後乃ち聖道の大を窺見し、始めて遂に其説を棄置す、臣請ふ其短を言ふなく、其長者を言はん、夫れ西方の佛釋迦を以て最と爲す、中國の聖人堯舜を以て最と爲す、臣請ふ釋迦と堯舜とを以て比して而して之を論ぜん、夫れ世の最も釋迦を崇慕する所のもの生死を脱離し超然世に獨存するを尚ふ莫し、今佛氏の書具さに始末を載す、謂ふ釋迦世に住し法を説くこと四十餘年、壽八十二歳にして而して沒す、則ち其壽亦誠に高しと謂ふ可し、然れども舜年百有十歳、堯年一百廿歳其壽之を釋迦に比すれば則又高きなり、佛は能く慈悲施捨し、頭目腦髓を惜まず、以て人の危難を救ふ則ち其仁愛物に及ぶ亦誠に至れりと謂ふべし、然れども必ず雲山に苦行し、道路に奔走し、而して後能く濟ふ所あり、堯の如きは則ち端拱爲す無くして而して天下各其所を得、惟れ克く峻德を明かにし以て九族を親しむ、則ち九族既に睦ければ百姓を章平す。

則ち百姓昭明に、萬邦を協和すれば則ち黎民於變時雍、極まつて而して上下草木鳥獸に至ること咸な然らざるなくして仁愛物に及ぶ、之を釋迦に比すれば則ち又至るなり、佛能く方便法を説きて群迷を開悟し、人の酒を戒め、人の殺を止め、人の貪を去り、人の嗔を絶つ、其神通妙用亦誠に大なりと謂ふ可し、然れども必ず耳提面誨して而して後能くす、堯舜に在るが如きは則ち四表に光被し、上下に格し、其至誠運る所、自然言はずして而して信じ、動かずして而して變じ、爲す無くして而して成る、蓋し天地と其德を合し、日月と其明を合し、四時と其序を合し、鬼神と其吉凶を合し、其神化方無く、而して妙用體無く、之を釋迦に比すれば則又大なり』云々と云ふのがある、此の如き明瞭なる事實あるものに對し、釋氏にかぶれたるものと誣ゆるが如きは甚だ暴論と謂はねばならぬ。

大橋訥菴も亦王陽明を輕視したるもの丶一人にして其説く所に據れば『余は嘗て陽明の學を喜び其説をも研鑽し其工夫をも體驗せしが、推覈多年の中一旦悟る所ありて其學の過誤多く純正ならざることを知れり、其過誤は全く窮理の功を外馳と思ひ只管心をもて事物を御せんと欲して、物に即て理を窮めざれは心も其正當を得難きことを知らざるに由れるなり、其他致良知知行合一など皆謬れる説なり』云々、是れ窮理に力を入れたるより起りし説にして、道義を主として説かんとするものは心を基とせざる可らずと爲すの説と相反すべきは當然のことであらう。

近者伊藤春畝も亦王陽明を誤解したるもの丶一人にて、今より三十年前王陽明を批評して某氏より大に駁擊されたることが古雜誌に載つて居るがそれに據れば『伊藤曰く、王陽明は始め佛法を學びて後に孔孟に戻りしものにて佛骨の表を草したことがある、それは韓退之の表文より面白く圓滑に出來て居つた、王陽明は頻りに知行合一論を吐いたが、尚今日の時會には適せず、陽明や退之の如きも畢竟度量の狹隘なるより破佛せしものにて、予は敢て佛教を破斥せず』云々、駁擊者曰く、『王陽明の知行合一が何故に尚今日の時會に適合せざるか、くだらぬ御託を云ふものに非ず、但し博文の如き人物には何年たつても良知學は適合せざるなり、則ち柄にあはぬなり、又度量狹隘云々に就ては軍國多事上下舉つて安き心もなき其時に當りて一個の○○に魂を奪はれ、千金之を購ふて○○を恋にするが如き大人的度量は王陽明には勿論あるまい、要するに伊藤などの批評は一場の茶番なり、滑稽なり彼等の如き漢子が苟も斯道に喙を容れ、王陽明の人物に就て云々するは宛も幇間の氣節を喋々し、娼婦の貞操を喃々すると一般到底眞面目に聽く能はざればなり』云々、其攻擊は餘りに激昂疎暴に過ぐるの嫌なきには非れども、苟も古の聖人鴻儒を批評せんとするにはそれ相應の智識的準備がなければ決して爲すべきものでは無い、王陽明の諫迎佛疏を覽ても王陽明は決して佛を破斥しては居らぬ、寧ろ大に尊敬して居る、乍併唯堯舜を有するの中國へ釋迦を入るゝの要なきを理義を盡して懇々と上奏したのである、其度量狹隘の評に至りては最も謬れるものにて、其權臣劉瑾が威力に任せて御史戴銑等二十餘人を逮捕したる際の如き、單獨抗議を申し立てゝ瑾の怒に觸れ廷杖四十を喰ひ且つ貴州龍場驛丞に謫せられ、炎荒の地に住し、瘴氣に侵され、欝憂に惱され、虺蛇と群を爲し、缺舌と交りて毫も屈せず、又前後數回の大戰に毎ねに勇邁無

比にして奇功を奏したるが如き、決して度量狹隘者の能く爲し得可き所に非ざるべしと信ず、蓋し王陽明を指して度量狹隘と評せるが如きは、全く王陽明の全部を知らざるものにして、古今多くの學者が評して以て眞儒首を回せば是れ英雄、前には孔明あり後には陽明あり、其學は談笑の中に紛を解き、難を靖んずるものであると稱して居り、其政治上戰略上に屢々大膽不敵の仕事を爲せるを以て觀れば、決して度量狹隘の人ではあるまい、其戰爭に於て屢々奇功を建て、文章に於ては百世の宗と稱され、筆鋒の鋭利と兵鋒の鋭利を兼有し、此士が一たび去つて天地空しとまで評されたる人物であるが如きは決して輕々しく批評すべきでは無からうと思ふ。

先頃逝去したる孫文は王陽明の『知るの難きに非ず行ふの難きなり』と唱へたる所謂知行合一說を反對に道破せるを誇りたるものなれども、其論旨は倫理的認識を排斥し、科學的認識を是認せるより起りし議論にして、恐くは道義學と科學とを混同したるの謬りには非ざるか否か、今日此頃數千年若くは數百年以前の道學中に科學の一部分たりとも發見せんとするは心得違ひの甚しきものであると思ふ、予は眞、善、美は誠であり、道であると信ずるものにて、人間界に缺く可らざるものたるを確信するものである。千古に亘りて磨滅せざるものは誠であり、道である、如何に人智進み文化開くると雖も、眞理は常に一にして變ることなし、是れ古今東西の聖賢唱ふる所の說が變改するの缺漏甚だ少き所以であらう、聖人の禮義が傳入せざりし以前は人皆羞惡の念なく、姑娣及び妹と婚して禽獸の行ひを爲したるさへありたるものにて聖賢一たび出で此行爲の甚だ羞惡なるを知つたのであることは支那も日本も同樣であつたことは歷史の證明する所にて之を改善して人間らしく導きたるは全く聖賢の力であると思ふ。

科學に於てはヒポクラーテスの說でも、マラチノの論でも今日採つて以て應用することは出來ぬが、道義に於ては堯舜孔孟の說でも、朱程陸王の論でも何萬年經るも捨てるわけには參らぬ、寧ろ採つて以て現代に應用せねばならぬことが甚だ多い、聖人の學は之を心に原つき、心は天に原づく、悉く一誠であつて學問の要は、唯誠を求むるに在りと云ふ確乎たる嚴則のある以上は、未來永劫棄却するわけには參るまい、王法聖道には少くも邪曲俗惡か無い、堯が天下を舜に傳ふるに際り允に其中を執

れと訓示した、中は即ち誠である、舜が禹に天下を傳ふるに際り、曰く惟れ精、惟れ一と訓示した、惟れ精、惟れ一も同じく執中にして誠である、孔子の訓示は仁を求むるに在りて、子思は之を誠にするを訓示した、其他聖賢鴻儒の說く所一として誠心誠意、仁義禮智の範圍を脫するものは無い、予は陸象山の所謂『東海に聖人出づるあるも此心同じき也、此理同じき也、南海北海に聖人出づるあるも此心同じき也、此理同じき也、千百世の上聖人出づるあるも此心同じき也、此理同じき也、萬億世の下聖人出づるあるも此心同じき也、此理同じき也』と同樣の意思を以て古聖賢を尊崇し、併せて將來の聖賢を待つものであるので、敢て自ら聖人君子を氣取るものにも非ず、物知り顏せんとするものでも無い、唯陸象山の言ふた『念慮の正しからざる者も頃刻にして之を知らば即ち以て正すべし、念慮の正しきものも頃刻にして之を失はゞ即ち不正となる、形迹を以て觀るべきものと觀る可らざるものとあり、必ず形迹を以て人を觀れば則ち以て人を知るに足らず、必ず形迹を以て人を繩さば則ち人を敎ゆるに足らず』云々なぞは能く守らねばならぬものと思つて居る。又予は妄りに道義を以て人を諡し、人に强ゆることなどは好まぬ、寧ろ自然の良知に任ずることがよからうと思ふ、其他人の一身上に口を入れて彼是申す如きことは餘計な御世話であつて又佐藤一齋の『人の賢不肖を論ずるに必しも細行を問はず、必ず須らく倫理大節の上に就て其得失如何を觀るべし、然らざれば世に全人なし』と言ふたことは大に共鳴するものであります仁義禮智忠君愛國等のことは素と良知であつて、別に强制すべき筋のものでなく、唯自然に固有するそのものを永く消失せしめざることに相互援助することが人間交互の當さに努むべきことであると思ふ。

孟子は仁義禮智を性なりといひ、惻隱羞惡辭讓是非の心を仁義禮智の端なりと說く、我國の徂徠は仁と智とは德なり、義と禮とは道なりとして其四性となせしを非なりとす、兎に角それが德であらうが、道であらうが、其名甚だ好く、又之を行ふて善きことなれば、其萬世不朽のものなることは當然のことであらう、孔子の說ける所は縱橫上下極めて廣大なるものなれども其宗旨を約言すれば、求仁の二字なり、仁は人の全德にして至公至平のものである、孔子の孫の子思の謂ひし立誠も、堯舜の執中も悉く同一の道にして、これが聖學の眞訣であらうと思ふ。

司馬遷は儒道は博くして要寡く、勞して而して功少し、是れ以て盡く從ひ難しと言はれたが、予はそれと反對にて儒道は其說く所至簡至要であると信ずる、其妄りに膨大となれるは後人が註釋又註釋、添加又添加することが非常に多くなつたからである、聖賢の學は素と道義と治國とを主となしたるものなれども、宋儒及び幾多の後人が妄りに助勢して其範圍を擴大し、窮理だとか、物理だとか稱して天文理化の學問迄もそれに含有するが如く說明せんとするに至つたので、大に混雜過大になつたのである。若し漢儒の輯錄したまゝに止めたなら決してそう多いものでは無いのである。

道義學はどうしても科學と併行して保存せねばならぬ、之を知るのは別に庸人に知られんとする爲めでも無く、利を收めんとする爲めでも無い、陸象山曰く『周道の衰ふる民は機巧を尙び、意を功利に溺らし、其本心を失ふて將さに以て名を治めんとす、名も亦終に滅す、將さに以て利を收めんとす、利も亦終に盡く、然らば則ち君子は終古靡せず、庸人に知られずして而して識者に知らる、群小に容れられずして而して古人に愧つること無し、俯仰浩然、進退裕有り』云々と、此事は本心を失はざるもの幾人も存在せざる現社會に於ては特に遵守すべき言なりと信ずるのである、人間は敢て庸人に知らるゝの要なく、群小に容れらるゝ望みもなく、唯古人に愧ちざる工夫こそ肝要であらうと思ふ。

そこで予は簡易明白萬人をして實踐躬行に最も便益なる實用的人間學は何であるかと云ふことを多年研究して見ましたが、陽明學が最も適當なものであると云ふことを發見したのである、乍去予は別に王陽明を深く研究したのでもなく、それを拜崇する意味でもなく、それに心醉したわけでも無く、唯其簡明に自然を說いたものたるを知つて之を利用せんとするものであります、又我國に於ても外國に於ても少しく卓越せるものは陽明學を知らずして既に自然に王陽明主義たるの素質を備へて居るものゝ頗る多きことを知つたのであります、例之へば福澤諭吉翁の爲したる經路を見るに多くは悉く良知一點張りにて、頗る能く王陽明の主義と符合するものであります、こゝに揭げてある額の交詢社發會式の訓示の如きも交詢社は知識の交換、諸事の諮詢を目的とするとあるが其言ふことは易いが之を實行することは漸次疎遠になり勝ちのものであるから注意せよと云ふ意味の如きは則ち知行合一を示したものである、又其多くの演說に就ても良知、知行合一が自然と現はれて居ることは誰人にも諒

解することが出來る、則ち事頗る簡易にして明白、且つ悉く實踐躬行的であり、良知の發揮であることを知つたのであります

陽明學を學んだ人が其學に就て詩、文、語等を作りしものは頗る多種あれども。何れも脫俗簡明なるは余の最も好む所である。三輪執齋は王陽明の四言教を左の如く和歌に現はして居る。

（一）行舟のなにかさはらむよしもなく
　　あしもなにはの水のこゝろに。

（二）そことなくそよぐ難波のうら風に
　　よしあしの葉やみだれそむらむ。

（三）よしあしのかけもまかはすなには江や
　　そこ澄みわたる水のかゞみは

（四）よしをとりあしをかりなばふしの間に
　　迷ふなにはのゆめも覺まじ

中根東里の左の語も亦其源は陽明學より割出したるものなることは疑なきことであらう。

（一）他山の石は玉をみがくべし
　　憂慮のことは心をみがくべし。

（一）水を飲んで樂むものあり
　　錦を衣て憂るものあり。

（一）出る月を待つべし
　　散る花を追ふこと勿れ。

横井小楠に左の詩がある。

吾慕紫陽學、學脈淵源深、洞通萬殊理、一本會此仁、進退任天命、從容養道心、嘆息千秋久、傳習有幾人。
園碁何其變、顏面一不同、人事率如此、變態誠無窮、何以應無窮、靈活方寸中、果知君子學、總在格知功。
心官只定思、思則眞理生、或在一身上、又入天下平、古今天地事、莫不關吾情、寂然一室中、意象極分明。

五月廿日の東京慈恵會醫科大學の雄辯會にて其幹事から日本語、獨逸語の何たるを擇びませんから。王陽明に關係の一言を願ひますとのことであつたので。獨逸語を以て日本に於ける陽明學の元祖たる中江藤樹の一小逸話を爲したことがあるのでこゝに附記する、則ち藤樹が追剝ぎに出會ひ彼等を改心せしめた一節である。

Meine Jungen Freunde!

Ich erlaube mir, Ihnen eine kleine Erzählung zur Charakteristik des Nakaye Tojiu (Japanischer Gelehrten der Chinesischen Weisheit) zu machen. Tojiu kam einst Nachts vom Felde nach Hause zurück. Plötzlich traten einige Räuber aus dem Walde hervor, schnitten ihm den Weg ab, und bedrohten ihn, indem sie ausriefeln „Reisender! binde deinen Geldsack los und gieb uns das Geld zum vertrinken!" Tojiu starrte sie an und gab ihnen 200 Sen. Die Räuber zogen drohend die Schwerter und sagten,, Was wir von dir fordern, ist nicht allein das übergieb uns sofort auch die Kleider und dein Schwert. Wenn nicht, dann machen wir dir kulzen Process!" Tojiu sagte Jhnen "Wartet einen Augenblick. Ich Will erst darüber nachdenken, was richtig ist, ob ich es geben soll oder nicht." Daran machtet er die Augen zu und schlug die Arme übereinander. Nach einer Weile sagte er den Räubern „Ich denke doch, dass ich keinen grund habe, euch ohne weiteren meine Sachen abzuliefern; es sei denn, dass ich im Kampfe unterliege." Dann griff er nach dem Schwert und sagte „Wer kampft, sage zuerst den Namen. Ich bin Nakaye Tojiu aus Omi." Da bekamen die Räuber grossen Schrecken, und die Schwerter wegwerfend warfen sie sich auf die Erde nieder

und sagten. In unserem Dorfe giet es selbst kein Kind, das nicht weiss, das der Gelehrte Nakaye Tojiu ein Weiser ist. Wir leben vom Raub; aber wir möchten doch nicht damit dem Weisen auf den Leib rücken. Sei uns gnädig und vergieb uns unsere Unwissenheit." Tojiu erwiderte ihnen „Kein Mensch ist frei von Fehlern. Es ist aber nichts besser, als wenn ein Mensch für seine Fehler Reine empfundet." Dann begann er über die Lehre von Übereinstinmmng des Wissens und Thuns zu sprechen. Die Räuber waren durch seine Rede so gerührt, dass ihnen die Augen feucht wurden. So wurden alle Mitglieder der Räubesbande gute Menschen.

右はおとぎ噺同樣のものなれども子供の爲めにもと想つて載せたのである。

王陽明の學說を之を歐人に對比せんに無理にコヂつくればソクラーテスに似たる所もあり、ショッペンハウエル、ハルトマン等に近き所もあり、レッシングに至りては全く致良知を以て始終したやうに想はれる。

余がレッシングを稱して致良知に始終したと云ふは如何なる理由であるかと云ふに唯ケーベルが崇拜して居つたからと云ふ意味計りでは無い、彼は慥に宏量、自由、誠實、高貴、知行合一を以て一貫したる眞摯なる批判者であつた、ケーベルは我等にして若し猶外にソクラーテス、カント、デカルト、スピノーサの如き人々を有つてゐなかつたならばレッシングをば實に哲學及文學上の偉大なる人物中のウニクームとなしたであらうと云ふたが、敢て誣言では無からうと信ずる、レッシングを攻擊するものは彼の耐久力の缺乏、確信の缺乏、變り易き氣分等を擧げて居るがこれは彼が駄作を欲せず、其作物を未完成のまゝ放棄したる爲めであるとのことであるが、それは彼の著作を覽れば如何に獨立不羈、高度の率直、人格の高潔が知らるゝのである、彼の結婚したのは四十七歲(千七百七十六年後桃園天皇安永五年大雅堂住吉廣守等の歿せし年)であつた、丁度今より百四十八年前である、夫人はエーヴァと名くる婦人であつた、乍併彼の家庭は甚だ寂しく甚だ不幸であつた、結婚の次の年十二月末に彼の一人の男の子が生れたが數時間の後死亡した、其後數日にして其母親も他界した、千七百七十八年一月三日レッシングはその友エッシエンブルヒに宛てゝ次のやうに書いてある。『妻の病床に惱める此際に於て親愛なる御同情に感謝す

僕の喜は全く束の間であつた、而してあの悴を失ふことは實に悲哀千萬であつた、何となればあの子は誠に聰明であつた、貴君は僕が短時間父親たりし身として最早親馬鹿になりしと笑ふ勿れ、あの子は鐵の鉗子を以て此世に引き出されねばなかつたが、これは蓋し其聰明を證する所以では無いか、彼れは生れ落ちると同時にどうも此世は變だとの不審を起したものらしい、あれが再び此世を遁るべく第一の機會を捉へたのは聰明と云ふべきでは無いか、が、又あの小坊主は必ず母親をも一緒に引摺つて行くに相違無い、實際彼の女の助かる望みは甚だ少いのだ、僕もいつか一度は他の人達のやうに幸福になりたいと願つたのであつたけれども僕はどうも廻り合せが惡かつた云々、これはハイネの評せし如く機智の裡に陰欝慘憺の氣を帶ぶる文句では無いか、其後一週間にレッシングは妻の死を簡單に報して居る、『僕の妻は死んだ、而して僕は此經驗までしてしまつた、僕にはしようと云つても、もう此種の經驗は多く殘つて居る筈がないのが嬉しい、これで僕も全く氣が輕くなつた、』云々、それから彼は悲哀を忘失せんが爲めに精神的催眠劑として他事は何事をも考へずに一心不亂に千古不朽の六大著述を完成した。有名なる人類の教育 Erziehung des Menschengeschlechts 亦其一である、レッシングの言葉として『余は何も急ぐ必要は無いでは無いか、全永遠は余のものでは無いか』と云ふのがある、なんと大いでは無いか、レッシングは千七百八十一年二月十五日即ち光格天皇天明元年五十嵐俊明、湯淺常山等の死したる年に上天した。如何に偉大なる人々にても長所もあり短所もあるが彼は宏量、高雅、誠實にして缺點の無き致良知の人であつた、彼は苟も馱作せざる人であつた、博學多識の人であつた、彼は晩年三年は殆んど蟄居して多年貯蓄せる知識を纒めた人であつた、彼は慥に獨逸文學の革新家であつた、余がレッシングを撰んで哲學者文學者中の致良知者と賞揚するも無理ならぬことゝ信ずる。

余は王陽明に心醉して居るものでも何でも無いが。其簡易明白と實踐躬行主義と云ふことが好きなので。先人の言としてはつい王陽明を引出すやうになるのである。過日門下諸賢の招待席上の謝辭の後に會同の一人が余の前に來り相變らず王陽明が出ますねと云ふたが。余はそれほどかぶれて居るとは想はぬ。其證據に其節の演說を左に示すことにする。

最愛なる淑女並に同友各位！

只今葛目君の御發言に據り本夕御會合の趣旨を拜承し我等家族一同は感謝の辭を發見するに苦むものであります。

拙者は自身の還暦に際しては三十年來經驗し、若くは蒐集したる專門に關する事項其他各種の事項五六卷を一纒めとして上梓し諸君の一覽に供する意思にて、數年前より其稿を起こし殆んど三年間を費やして略完成し、一昨年夏濠洲出發前に「バスケット」二個に納めて書齊に入れて置いたのですが大震災の爲めに一枚も遺さず燒失し、悉く死灰となりたる次第でありまして本日諸君に御目にかけるの運びに至らざりしことは頗る痛痕至極に存じて居るのであります、乍併一方より考ふれば釣り落したる魚はいつでも大きく、變死したる婦人はいつでも絶世の美人と定まつて居るやうのわけにてどうせ碌な著述では無いのですから、或は灰燼に附したことが寧ろ自他兩方の幸福であつたかも知れません。

そこで今日は老境に追込まれる記念として何かなければならぬと種々考へたる末最も安直にして格別皆サンの御手數をもかけぬ記念物を案出いたしました、それは多年用ひ來りましたる極到なる拙號を改めて本日只今より極樂道人と致しますことです、其極樂としたる理由の一は拙者は元來不息の質にして一生涯安樂を得やうと思はぬ運命を有するものと覺悟して居りますのでせめて其號丈けも極樂と致して置くことがよからうと考へたる爲め、二は年來座右銘として居る隨遇自安は則ち極樂である爲め、三は極めて道を樂むの人として、前賢の道を樂むことを遺れずに、其不德を補はんとする爲めでありますることを御披露致して置きます、但し敢て今日より極樂行きを計畫する野心を出したわけでも無く、俄かに安樂を欲するやうになつたのでもありませんことを御斷り申して置きます、又此號は頗る俗惡なるやうでありますが、實は頗る雅致あるものでありまして、其意味亦大に深長なるものあるを知るのであります。それに就ての詳細の述義は他日御目にかけるの時あるべしと存じます。

淑女並に同友各位！

乞食の子も三年を經れば三歲となり、中央亞弗利加の土人も六十年を經れば六十歲となると云ふ自然の理に違はずして、

拙者も亦聖代の光被に依り不知不識の間に還暦に達し、門下に多數の博士ドクトル等の出藍者を見るに至り、本日圖らずも家族と共に公會に引出されて馬齢を發表せらるゝの運命に陷りたるわけにて、轉た感慨無量であります、何卒御推察を請へます。

今より二三十年前迄は還暦祝典なるものは殆んど人生恒例の一としてありましたが、近時は至つて稀有の事になりましたることは各位御存知の通りであります、これ生存競爭の猛烈となりたる現代に於ては昔時と異なりて人間の老境に入ることが十五年以上延引することゝなりたる爲めにも因りますが、又一には多くの被告人が年齢の公開暴露を厭ふことゝ、一には何となく之を境界として人生の行路に一段落を附けられて前途の活動を塞がるゝやうの心地がするので、之を秘し、之を避くると云ふ傾向のあることも爭ふ可らざる事實であります。而して拙者は之れに就て如何に考ふるかと申せば、寧ろ大に悅ぶものであります、何となれば人生の六十歳は現代人にとつては事業の半生であつて例之へば獨逸のヒンデンブルヒ元帥は七十九歳にて大統領選擧を爭ふて之を獲得し、日本の大倉喜八郎翁は八十九歳にて滿蒙跋渉の途に上りたるが如きは最も新しき事實にして、其他各國到る所七十歳以上にて大事業に當つて居るものは頗る多いのでありまして、則ち現代の還暦なるものは其後半生に移るの門出と看做すべく之を御祝下さることは移り行きの送別會であらうと信ずるからであります、則ち右の意味を以て今日の懇篤なる御雅招を御遠慮なく拜受したる次第であります。

扨不知不識の間に經過せる拙者の六十年を追懷すれば實に往事悠々茫々として、其跡烟の如く、夢の如き感あるものにて又實にアイヘンドルフの所謂 Einbildenbuch scheint alles, was vergangen（往事は總て一絵巻物の如し）の感なくんばあらずです、（第一回渡歐より歸朝後既に三十三年に達す、其後三回海外に航し在外期間合計六年半）世間の人は其間拙者が時世の變遷と共に學閥の邪溪ヶ嶽を超へ、惡漢の中傷ヶ川を渡り、家庭の不幸ヶ峯を突破し、政治の魔海道をも通過し、事業の危險ヶ淵へも衝き墮されんとし、屢々貧苦ヶ峠にもさしかゝつたる等種々の艱難と奮闘したるが如く恰も立志傳中の人間でもあるかのやうに批評して下さるそうですが、それは途方も無き見當違ひでありまして自分としてはこれ迄

何等特別の苦勞に遭遇せしこと無く、常に各方面より能く可愛がられ、平々坦々なる道路を弱き脚を以てチョコ〳〵と平凡に此處迄到着したるものでありまして、常に大に感謝しつゝあるものであります。龍場五年の艱難も知らず、九死一生の勞苦もなく如何にしても卓越せる事蹟を遺すことが出來る筈は無いのです。

拙者は貧弱なる肢脚を有するものではあるが、唯成る可く官邊車に依らず、先達馬に乘らず、援助船に賴らず、獨立獨歩すべく心掛け、公平無私、不偏不黨に中道をヒョロ〳〵歩むことに勉めたるものにて、是れ幾分先祖傳來の致良知或は知行合一の理を信じたる爲めであります、或はそれが爲めには俗界より觀れば反つて大なる不利益であつたかも知れませんが、亦多少の利益ありしことも認めたのであります、又拙者は諸君御承知の通り處世上には永く古言の隨遇自安と、趨避去就とを座右銘とし、晩年には不誘於譽、不恐於謗をも併用致しました、隨遇自安とは是非善惡、吉凶禍福は其なんでも遭遇せることが悉く自安のことゝ觀念することにて、悲喜苦樂は總て人生の試鍊でありまして、此悲苦なくんば是れ以上の悲苦あるべく、此喜樂無くんば是れ以上の喜樂あるべしと考へたなら、多く喜び、多く悲む心になれぬもので、遭遇したる總ての事を多く苦勞ともせず、多く快樂とも感ぜぬことになるのであります、趨避去就とは利に趨り、害を避け苦を去り、樂に就くを意味するものでありまして、總て人間は勝手なるものにて賢愚善惡を問はず、悉く此心を有せざるものはありません、則ち己が身に利益あることは之を取らんとし、己が身に損害あることは之を捨てんとし、苦痛は之を避けんとし、快樂は之れに就かんとするものであつて、其取捨の心に就ては君子小人何等の區別は無いものにて、則ち是れが自己の便利を求むる心なれば、則ち賢き心であつて智の一端である、而して之を正道に養成すれば君子の智となり、自然に放置すれば小人の智となると云ふことであります、而して拙者は可成丈け趨避去就を正道に養成せんと心掛けて見たのであります、ゲーテは Ich bilde mir nicht ein, dass ich recht habe, aber das weiss ich, aufs Rechte losgehe,（余は敢て自ら正義であると唱ふる程僭越ならざれども、乍併自分が正義に向つて邁進するものであるべきことを諒解す）と云ふたが拙者も亦常に此心掛けは有して居るが、天資短才不德にして常に及ばざるを懼れて居るものであります、露骨に申

せば拙者も亦少壯の頃は人間並に虛榮心を有したるものにて、爲めに各種の誘惑に應ぜんとした場合も少からず、(或る時代に某總理より同志たりし花井博士と共に某官に就かんことを促がされたることありて少しく心を傾けたることもありたり)。又任俠にも溺るゝの癖ありて何事にも忌憚なく勇往邁進したるものです、爲めに屢々嫉視誹謗の標的となりたる時代もあつたのだそうです(自分にはそれ程感じませんでした)、而して當時の拙者は慥に譽れに誘はれんとしたのです、謗りにも恐れたのです、而して不誘於譽、不恐於謗なる語は固と拙者の益友荒木鳳岡の所有品であるが、雜駁輕薄にして下向的に人間離れをしたる現時にはこれが最も緊要であると感じたので、十五年前より之を借用遵守することに致したるものにて爲めに大に神思の平安を自覺するに至りましたる次第であります。

前述の如く三四十年間碌々として何等寸毫も國家社會に貢献する所なく今日に至りたる拙者は常に古人に對し不面目を感じて止まぬもので則ち前賢を追懐すれば其不才を恥ちざるを得ぬのであります、古人は時世の關係上則ち社會狀態の複雜致育の統一等の爲めに變化せる現代人に比するに壯年時に於て十五歲以上は早熟の差異ありたることは事實でありましやうが、兎に角六十歲に達しても尙ほ平凡なりしこと拙者の如きは少かつたです、其事業の是非善惡は別として後世に其名を遺したる人々の事蹟と其年齡との關係を觀るに現代人に比して著しき差あるを知るのであります、即ち

寬政五年五十六歲にて歿したる林子平が上書して學政武備貨殖等九篇百五十九條を述べたるは三十六歲。

安政二年五十歲にて歿したる藤田東湖が彰考館總裁となりたるは廿四歲にして烈公の補佐として天下を震動せしめたるは三十歲前後、其千古に朽ちざる回天詩史、弘道館述義其他の傑作を完成したるは三十九歲より四十一歲迄蟄居を命ぜられたるの時のこと。

天保三年五十六歲にて歿したる頼山陽の文才經綸を以て其名を天下に轟したるは既に三十歲前のこと。

元治元年五十四歲にて歿したる佐久間象山は三十歲前に於て其經綸抱負頗る遠大なるを知られ、就中開國論者と西洋文明の鼓吹者として既に天下に認められたるものである。

安政六年二十九歲にて殺されたる吉田松陰、二十六歲にて殺されたる橋本左内、三十五歲にで殺されたる頼三樹、四十四歲にて殺されたる梅田雲濱は共に二十代に於て既に勤王の勇士として名を知られ、卓越せる社會の指導者でありました。

其他賤嶽の戰に於ける福島正則は十七歲。

保元の亂に於ける源爲朝は十八歲。

大阪陣に戰死したる木村重成は二十一歲。

平治の亂に於ける平重盛は二十二歲。

賤嶽の戰に於ける加藤淸正は二十二歲。

一ノ谷の畠山重忠は二十六歲。

信農を取りたる武田信玄は二十三歲。

前九年の役に於ける源義家は二十六歲。

宇治川合戰の源義經は二十六歲。

兵を起したる日の木曾義仲は二十七歲。

桶狹合戰の織田信長は二十七歲。

北條氏討滅の日の足利尊氏は二十九歲。

王家に叛旗を擧げたる尊氏は三十一歲。

朝鮮出征に上りたる加藤淸正は三十一歲。

川中島合戰の上杉謙信は三十二歲　武田信玄は四十一歲

兵を擧げたる時の源頼朝は三十三歲。

北條氏を滅したる新田義貞は三十三歲。

關ヶ原の黑田長政、福島正則は共に三十三歲、石田三成は三十八歲。

長篠役の德川家康は三十四歲。

戰死したる項羽は三十一歲。

保元の亂の源義朝は三十四歲。

京都に入りたる日の織田信長は三十四歲。

戊辰の日の木戸孝允は三十五歲、大久保利通は三十八歲

幕府創設の源頼朝は三十九歲。

支那統一の秦始皇は三十九歲。

中國征伐に向ひたる柴羽秀吉は四十一歲。

征東總參謀の西鄕隆盛は四十一歲。

小牧役の德川家康は四十三歲。

切腹の日の大石良雄は四十五歲。

戰死したる楠木正成四十三歲。

一ノ谷の熊谷直實四十八歲。

ヂスレリーが少壯時田舍に於て大言壯語的の宣告樣演說を爲せし時一句毎に聽衆に嘲笑せられ予は平生幾度も許多の事を爲し始めは必ず時眼に投せざれども終りに至りて必ず功績を成就す予は今此席を退く諸君後日必ず我說を靜聽するの時あるべしと呼號したるは廿四歲の時にして後來果して衆人の視聽を驚かすの人となれり。

シエークスピアが博識にして人間萬事の撮要錄と云はれたるは二十歲の頃。

ワツトが蒸氣機械製造に志したるは二十歲代なり。

ヂエンナーの種痘發明亦少壯の時に於てせり。

ボツチヤアが陶磁器製造に成功してザツクセン王より男爵を授けられ其製品精巧獨得の技能なりし爲めに脫走を恐れられ監禁されつゝありたるは廿七八歲の頃なり。

カーライルが有名なる「フレンチレヴヲリユーション」の原稿を臺所に置き下女にたきつけ代りに燒かれ復び稿を起して完了せしは廿六歲頃なるべし。

其他ワシントン、ビスマーク、ガンベツタ、グラツトストン、ウキルヒヤウ、リスター、パストウル、シヤルコー、ゲルハルト等各方面の偉人が其名を爲したるは何れも四十歲以前ならざるは無し、還曆の碌々生たる拙者の痛歎するのも無理ならぬことゝ御推察を願ひます

又古來六十一歲にて歿したる有名なる人士は比較的至つて少きは甚だ不思議にして。寬文元年堯然法親王。寬政二年狩野榮川。

文政八年太田錦城。
文化九年山本北山。
弘化元年菅井梅關。
文化十四年伊藤東里。
安政五年野田笛浦。
文政元年山口素絢。
萬延元年水戸烈公。
文政六年秦星池。

元治元年福田半香。
明治二年橫井小楠。
明治三十一年馬杉雲外。

等が何れも六十一歲にて歿したるを知るのみである。

拙者は右述べたる多くの前賢に對し其不才を耻つると同時に古來還曆にて逝去せられたる古人に對し深く同情するものであります。

終りに臨み重ねて今夕の御厚志を謝し併せて各位御一家の益々安寧幸福ならんことを祈るものであります。

284
494

大正十四年六月二十日印刷
大正十四年六月廿五日發行

【定價金五拾錢】

編者　金杉英五郎

發行兼印刷者　東京市神田區駿河臺南甲賀町十三番地　井形貞吉

印刷所　東京市神田區駿河臺南甲賀町十二番地　駿河臺印刷所

發行所　東京市神田區駿河臺南甲賀町十二番地　保生舍

版權所有

終